

令和 4 年 5 月 11 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00006

研究課題名(和文)「謝罪とは何か」に関連する諸問題についての哲学的な考察

研究課題名(英文)Philosophical research on apology

研究代表者

川崎 惣一(Kawasaki, Soichi)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：30364988

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が明らかにしたのは、謝罪が、固有のアイデンティティを備えた諸人格が「社会のなかで共に生きる」という人間存在の根本条件を基盤として、社会的な信頼や名誉の維持ないし回復を目指して行われるものである、という事情である。謝罪の前提をなす責任の自覚は、他者たちによる非難と責任の追及とを主要な源泉としており、道徳的アイデンティティを備えた人格として「善き生」を生きることを目指す個人は、そうした責任を内在化し、謝罪を促される。以上のように、「謝罪とは何か」という問題は、人間存在の根本条件の解明を目指す哲学的人間学における根本問題なのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

謝罪は「社会のなかで共に生きる存在」という人間存在の根本条件に基づいたきわめて倫理的な振る舞いであるにもかかわらず、これまで、哲学的観点から包括的な仕方で考察されることがなかった。謝罪への促しは、私たちがお互いを「アイデンティティを備えた人格」として認め、互いに尊重し合うということが基盤となっており、「善き生」とは何かという根本洞察をここに見出すことができる。このように、謝罪という行為に関する哲学的な考察を深めることによって、私たちは人間存在に対する深い理解を得ることができるようになるのである。

研究成果の概要(英文)：This study clarified that apology aims to maintain or restore social trust and honor based on the fundamental condition of human existence that we live together in society as personalities with unique identities. Awareness of responsibility, which is the premise of an apology, is mainly sourced from criticism and pursuit of responsibility by others, and individuals who aim to live a "good life" as a personality with a moral identity internalize such responsibility and are prompted to apologize. As mentioned above, the problem of "what is an apology" is one of fundamental problems in philosophical anthropology that aim to elucidate the fundamental conditions of human existence.

研究分野：哲学

キーワード：謝罪 責任 人格

1. 研究開始当初の背景

- (1) 「謝罪」の問題は、哲学・倫理学の分野ではほぼ手つかずの状況にあり、現実の世界における「謝罪」の困難さおよびその困難さを構成している複雑な諸要素を考えた場合に、そこには哲学的に深めていく余地が大いに残されていると思われた。
- (2) 近年、フランス現代思想において、「赦し」の問題に関連するアプローチが哲学のみならず政治学・歴史学の分野において、少しずつ展開されるようになってきており、「謝罪」の問題への導入として有用であると思われた。他方で、行為論、自由意志論、責任論などに関する、哲学・倫理学における数多くの研究の蓄積なども取り入れることができる。これらを「謝罪とは何か」という根本的な問いに組み込むことで、独自性のある研究を生み出す見込みがあると思われた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「謝罪とは何か」に関連する諸問題についての哲学的な考察を行うことにある。より具体的には、「私たちはなぜ謝罪しなければならないと感じるのか」という観点から、「謝罪」へと私たちを促す動機づけの問題を解明することであり、またこのことを通じて「責任とは何か」という原理的な問いに対して新たな論点および切り口を提示することを目指している。そして、以上のことを通じて、謝罪が何を指すものであり、何を達成しようとするものであるのかについての包括的な洞察を得ることが、本研究の最終的な目標である。

3. 研究の方法

文献資料の収集とその読解および解釈を通して研究を進める。適宜、さまざまな学会および研究会に参加し、情報収集等を行う。

謝罪に関連する諸問題は哲学・倫理学に限定されない非常に広い射程に及ぶものであることを考慮し、概念的な整理および考察に関してはもっぱら哲学・倫理学関連の文献資料を使用した。適宜、歴史学・社会心理学・社会学等、関連する諸分野の文献資料を参照する。

4. 研究成果

本研究を通じて得られた成果をまとめるならば、次のようになる。

謝罪は「社会のなかで共に生きる存在」という人間存在の根本条件に基づいたきわめて倫理的な振る舞いであるにもかかわらず、これまで、哲学的観点から包括的な仕方では考察されることがなかった。謝罪への促しは、私たちがお互いを「アイデンティティを備えた人格」として認め、互いに尊重し合うということが基盤となっており、「善き生」とは何かという根本洞察をここに見出すことができる。このように、謝罪という行為に関する哲学的な考察を深めることによって、私たちは人間存在に対する深い理解を得ることができるようになるのである。

本研究において論じられた個別のテーマに関する研究成果は次の通りである。

(1) 「人はなぜ謝罪するのか」という全般的な問いに関して

一般に、謝罪の目的は「過去の過ちを償うこと」にある、と理解されているように思われる。しかし、過去を書き換えることはできないし、後悔や自責の念だけでは、私たちを謝罪へと促す理由としては十分ではない。むしろ謝罪は、未来における個人のアイデンティティや、人々の間の関係をよりよいものにするために為される、と理解されるのがふさわしい。

私たちは個別の行為をその担い手である人格に結びつけて理解するという傾向を持っている。過ちとされる行為は、その担い手である人格の評価を著しく下げるであろうし、反対に、加害者は謝罪することによって自らの人格の評価を高めることができるであろう。ただし、謝罪によって加害者が後悔や自責の念から解放されるかどうか、被害者が苦しみや傷つきから癒されるかどうか、加害者が被害者から赦しを得られるかどうかといったことは事前に確実に予測できることではなく、その意味で謝罪はつねに「賭け」であるが、それでも人があえて謝罪に踏み切るのは、加害者たる自分自身および被害者、そして両者を取り巻く人々のよりよい在り方とお互いのよりよい関係の構築を目指してそれを実現したいと願うからである。

したがって、謝罪の意義は〈加害者と被害者、および両者を取り巻く人々との間によりよい人間関係を（再）構築すること〉にあり、私たちが謝罪する根本的な理由は、私たちが社会的かつ倫理的な存在であり、未来において、他者たちと共に、幸福でより善い生を送ることを望むからだ、と言える。

(2) 道徳的責任と自由意志の問題に関して

一般に責任とは、問題となっている行為を実行した行為者とその周囲の他者たちの間で成立するものである。とりわけ道徳的責任は、ストローソン (2010) のいう、他者たちの「反動的感情、態度」によって成立する。すなわち道徳的責任は、問題となっている行為がなされた後で、その行為に対する他者たちの反動的態度がその行為者に差し向けられるという仕方で、行為者に対して遡及的に成立するものなのである。そして、問題となっている行為が因果的に決定されたものであるなら、行為者に対する道徳的責任の追及はなされないか、あるいはその追及は弱められることになる。

いわゆる「フランクファート事例」が明らかにしているように、問題になっている行為に関して他行為の選択可能性がなかった場合でも、当該の行為に対して道徳的責任を追及することは可能である。重要なのはその行為の意味が他者たちにどう受け止められたかであり、この点において、道徳的責任は決定論と両立可能である。

道徳的責任の成立条件として有望に思われるのは、Fisher and Ravizza (1998) が示した「誘導コントロール」という考え方である。つまり、行為者の「誘導コントロール」の下にあった行為については、道徳的責任を追及することができる。

しかしそうだとすると、この「誘導コントロール」は自由意志を前提するものではなく、道徳的責任が追及される行為ないし行動のすべてにおいて、自由意志が必ず見いだされるというわけではない。したがって、道徳的責任は自由意志を前提とするものではない。ただしこの結論は、自由意志をどのようなものと捉えるかによって変わってくる可能性がある。

(3) 道徳的アイデンティティに関して

自我アイデンティティは自分自身の同一性と持続性の自覚であるが、つねに生成の途上にあり、変化しつつあるものでもある。道徳的アイデンティティは道徳性に関するアイデンティティであり、同様に生成の途上にあるものであるが、これは私たちの道徳的判断基準の基盤となっている。私たちは複数のアイデンティティを持つことができ、それらは互いに衝突することもあり得る。

道徳的アイデンティティは、自身が帰属意識をもつコミュニティのなかで身につけられるものであり、私たちは自身の属するコミュニティにおいて「善き生」のイメージを生き方のモデルとして受け取る。ただしそれは無条件にではなく、私たちはコミュニティ内部で共有されている価値や規範に違和感を覚えたり反発したりすることもある。道徳的心理学は私たちの道徳的行動が思考よりもむしろ直観や情動に強く影響されていることを証拠立てているが、道徳的アイデンティティはこうした直観や情動のレベルと結びついたものであり、思考によって吟味されたり矯正されたりする。

以上が本研究を通じて得られた成果である。これらはすべて、論文という形で公開されている。

最後に、本研究成果の位置づけとインパクト、今後の展望について記しておく。

本研究は、既存の研究成果を活用しつつ、それらを「謝罪とは何か」という総合的な観点から解釈し、位置づけ直そうとした点に特色がある。道徳的責任や自由意志、道徳的アイデンティティ等に関連する個別的な研究については、すでに多くの先行研究があり、そのそれぞれにおいて、非常に緻密な議論が展開されている。本研究はそうした個別のテーマないし論点に対する貢献を目指したのではなく、「人はなぜ謝罪するのか」という具体的かつ根本的な哲学的問題に対して、既存の研究成果を踏まえつつ、「社会のなかで共に生きる」という、人間存在の根本条件のもとに位置づけ直そうとするものであり、この点に、本研究の独自性がある。

本研究のインパクトとしては、個別のテーマないし論点をめぐる専門的な議論を、より包括的な視点のもとで再構築することによって、新たな論点ないし方向性の示唆を与えることができるという点にあるように思われる。哲学および倫理学において提示される個別のテーマや論点には、それが問題になる背景ないし文脈というものがあり、そうした背景や文脈に対して意識的に目を向けることで、個別的な研究の意義を見直し、あるいは深めていくことができるはずである。

今後の見通しとしては、本研究で得られた洞察をもとに、人間に関する他の諸現象、すなわち人間の思考や感情、行動等に関して応用しながら、その洞察の妥当性を検証しつつ、さらに発展させていく可能性を探っていきたいと考えている。

〈引用文献〉

- ① ストローソン, P. F. 2010. 「自由と怒り」、法野谷俊哉訳、門脇&野矢 (2010) 所収、31-80 頁。
- ② フランクファート, ハリー・G. 2010. 「選択可能性と道徳的責任」、三ツ野陽介訳、門脇・野矢 (2010) 所収、81-98 頁。
- ③ Fisher, John Martin, and Ravizza, Mark. 1998. *Responsibility and Control*, Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 川崎悠一 | 4. 巻 56 |
| 2. 論文標題 道徳的アイデンティティの成り立ちについて | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 宮城教育大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 91-101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 川崎悠一 | 4. 巻 55 |
| 2. 論文標題 道徳的責任は自由意志を前提とするか | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 宮城教育大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 53-64 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 川崎悠一 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 人はなぜ謝罪するのか | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 宮城教育大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 37-47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|